

女神転生EXCESS

竜王零式

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

二十歳になったばかりの大学生、武藤信彦。

夏休みのある日、彼は近所のお社で妙な目眩いに襲われる。

耳に届いたかすかな笑い声。

脳裏に浮かぶ奇妙なイメージ。

そして。

彼は「悪魔^{アクマ}」になった。

|||||

女神転生シリーズの設定を流用したオリジナル・ストーリーです。
主人公最強、生々しい性描写、グロイ残酷シーンなどがあります。

目次

プロローグ	1
悪魔新生	6
松平千鶴	14
謎の悪魔	21

プロローグ

夜の街を疾駆する影がある。

若い男だ。

明るく染めた短髪、程よく整った顔立ち。

均整の良い身体つきに、小洒落たジャケットを羽織っている。

普段は涼やかな顔面を必死に歪め、男はひた走っていた。

真夜中の、人気の失せた裏通り。

ビルとビルの狭間。

道なき道を、人外のスピードで走り抜けていく。

後ろは振り返らない。

振り返らずとも分かる。

今はただ逃れるしかない、ということだけは。

しかし。

「無駄よ」

突如。

前方に人影が出現した。

これも若い。しかも女性だ。

その上、この場に似つかわしくない格好——セーラー服を着ている。

こんな状況でなければ見惚れそうな美貌だった。

腰元の「きゅ」と締まった見事な肢体。

可憐と妖艶の絶妙な中間にあるまなざし。

ポニーテールに結び上げた、艶やかな黒髪が、夜風に舞い踊っている。

ただし。

少女の手には木刀が握られていた。

「なんだってんだ、一体」

男は吐き捨て、いったん足を止めた。

食事の最中に突然、圧倒的な恐怖と危険を感じて逃げた。

でも、こんな少女が相手なら、ただ逃げるのも癪しやくだ。

(女なら、怖がることもない)

男の目に怪しい光が灯る。

比喩ではなく事実として、不敵に笑う男の両眼が赤く光った。

だが、男の顔は次第にゆがんでいく。

起こるはずの変化が起こらないからだった。

「無駄だつて言ってるのに」

嘆息して、セーラー服の少女は言った。

「魅了チャームなんて効かないわ。私を馬鹿にしてるの」

少女は不機嫌に眉をひそめて近寄ってくる。

ゆつくりと間合いを詰める、という様子ではない。

ただただ無防備に、男に歩み寄ってくる。

舌打ちし、男は構えを取った。

力が通じない女はこれまでも何人かいた。特に驚くことではない。

だが、物理的な手段ならそうもいくまい。

少女の美貌から笑みがこぼれた。

「その方が、こちらとしても助かるわ」

男は再度舌打ちして、勢いよく地面を蹴った。

人間とは思えないスピード。

あつという間に少女との間合いを詰める。

そして少女の目の動きから、自分の動きが捉えられていないと確信する。

(悪いな、ちょっとだけ寝てろ)

握りこんだ右拳が、少女の腹部に放たれた。

——しかし。

瞬間、男は弾かれるように吹き飛んだ。

「ぐ、はっ……」

気がつけば、男は地面に倒れ伏せていた。

「て、てめえ……なに、を……」

男はうめく。

痛みはもちろんあった。

だが何より、状況がまるで理解できない。

そんな恐怖が、男を慄おのかせていた。

「何をしたか、かしらね」

鼻を鳴らして、少女は言った。

「何もしてないわ。あなたが勝手にふつとんだんでしよう？」

ただ淡々と。

嘲りも無ければ勝ち誇った様子もない。

事実を正確に述べただけ、という口調。

少女はうずくまる男の前に仁王立ちになり、溜め息まじりに告げた。

「終わりにしましょう。こう見えても忙しいの」

ぞわり、と怖気が立つ。やはりこの女は危険だ。

(くっ、早く逃げないと——！)

男は全身を奮い立たせ、全力で跳躍した。

眼下で急速に小さくなっていく少女が、「あっ」と声を漏らしたのが分かる。

五階建てのビルの屋上に着地した男は、そのまま隣のビルへ、また隣のビルへ。

連続で跳躍していく。

「あの女、もしかして悪魔デビルバスター被ひいてやつか。くそっ、忠告通り目立たないようにやってきたってのに——！」

こうなったらどこまでも逃げるしかない。

この街を捨て、別の街でやり直そう。

女はどこにでも、いくらでもいる。

安全な場所で、また気の向くままに犯し、喰らえばいい。

せつかく手に入れた「力」だ。手放してたまるか——。

どんっ！

いきなり全身に強い衝撃があつて、男の身体は吹き飛んだ。

何だ？

攻撃を受けた。

誰から——？

「……」

這いつくばって見上げると、そこに居たのは大きな鬼である。比喩ではない。

2 mを越える巨躯に、耳元まで避けた口、鋭い牙。

そして野放図の散切り頭からのぞく一対の角。

「苦勞様、か。お疲れ様、か」

眼前の化け物からではなく、別の方向から声がした。

特徴のある男の声。姿は見えない。

「いや。さようなら、だな」

男の意識はぷつりと消えた。

永遠に。跡形もなく。

残されたのはぐちゃぐちゃの死体だけだった。

ほどなくして、セーラー服の少女がやって来た。

怒気のコもった声で、立ち尽くす「鬼」の、その向こう側に呼びかける。

「どうして殺してしまったの。何か聞き出せたかも知れないのに」

返事はすぐにあった。

「この悪魔^{アックマ}を退治するのが今回の仕事だろう。非難されるいわれはないな」

声の主はやはり男。中年の、くたびれたスーツを着た男だ。

「この男は悪魔^{アックマ}憑きよ。こうなった経緯を調べないと、また同じようなことが起こるかもしれない」

「それを考えるのはお役人の仕事だ。先輩として忠告しておくが、悪魔^{アックマ}に妙なスキを見せるな。こいつらは倒せる時に倒すに限る」

喋りながら、男は手で何かを操作した。

すると、醜い子鬼が何匹も湧き出だしてきた。

それらが死体に群がり、貪り始める。

「悪魔召喚プログラム……まだ残っていたなんてね」

忌々しく、少女はつぶやく。

何年前か前、どこぞの学生が開発したという馬鹿げたプログラム。

ふつうの人間でも、使いこなせば悪魔アックマを使役できるといって、超特大の禁呪法だ。

もちろん当時、「裏」の世界は大混乱に陥った。

しかし、開発者みずからがアンチ・プログラムをバラ撒いたことにより、

なんとか事態は収束した。

だが、アンチ・プログラムの攻撃を逃れた者も、ごくわずかだが存在する。

大抵は処罰の対象になるが――。

「おっと、国の認可は得ているぞ。松平まつだいら一族の秘術というのも、似たようなものだろう」

「個人的に嫌いなだけよ。召喚士サマナーつて人種がね」

「あんな連中と一緒にされたくないな。おれはたまたまプログラムを入手しただけで、人道に反する行いはしていない」

「……信じるわ。そうでなければ、お国が認めるはずないもの」

「わかってもらえて嬉しいよ。今回の報告はおれがやっておこう。きみは早く帰りなさい。女子高生が出歩いていい時間じゃないぞ」

「ご忠告ありがとう、先生」

少女は吐き捨て、その場から姿を消した。

ほどなくして、大鬼や餓鬼の群れも姿を消した。

後には何の痕跡も、誰の気配も残っていないかった。

悪魔新生

都内にある賃貸マンションの一室。

3LDKのリビングに、だらけきった姿勢の若者がいる。

むとうのぶひこ
武藤信彦。

二十歳になったばかりの大学生だ。

いまは夏休みで、バイトも休み。

予定もないので、大画面のモニターで映画を見ている。

映っているのは、昨年大ヒットしたスペクタクル・ムービー。

人外のヒーローたちが協力しあって、世界の危機を救うという内容だ。

「けっこう面白いな」

大学生にもなって見る内容ではないかとも思ったが、なかなかどうして見ごたえがある。

迫力ある映像と、ヒーローたちの生き様に引き込まれていると、ガチャ。

と玄関が開く音がした。

確認するまでもなく、同居するたった一人の家族が帰ってきたのだろう。

「——って。もうこんな時間か」

時刻は5時を回っている。

高校の夏期講習に参加している妹が帰宅する時間だ。

信彦は頭をぽりぽりとかき、だらけていた姿勢を正した。

妹の桜子さくらこは、信彦に対して母親以上に口うるさい。

「ただいま兄さん」

「おう、お帰り」

声のほうを見向きもせず返事する。

それからしばらく、おたがいに無言。

背後から妙なプレッシャーを感じながら、

意識して映画に集中していると、

とたとたと足音が近づいてきた。

「兄さん？」

やけに凄みのある声がかかった。
反射的に振り返る。

兄とは似ても似つかない秀麗な眉目を、微かに歪めた妹の姿があった。

「どうした？」

「どうした、じゃないでしょう。ご飯炊いてくれてないじゃない」

信彦は「さっ」と顔を青くした。

「……あ。悪い、忘れてた」

「もうっ」

桜子はそっぽを向くように踵を返し、制服の上からエプロンを着けた。

すらりとした桜子の肢体に、その格好は良く似合う。

「待てよ、いまやるから」

「兄さんより、わたしの方が早いし美味しい」

吐き捨てて、桜子は米を研ぎ始める。

信彦は肩をすくめた。

このまま映画を見続けるのも落ち着かない。

プレイヤの電源を切ってテレビのチャンネルに切り替え、

そのまま自室へ退散した。

(はあ……自由気ままな一人暮らし、のはずだったのになあ)

桜子は3つ下だ。

昔から何をするにも優秀で、兄の立場など無かった。

高校も、地元の進学校に行くものとはばかり思っていた。

この近所にある有名校に入学すると知ったのは、

信彦の大学合格が決まった後である。

そうなれば兄妹きょうだいが同じ部屋を借りるのは自然で、反論の余地もなかった。

(家事とかひととおりにやらせてもらえるのは助かるけど)

それよりも、あの妙なプレッシャーが怖い。

信彦は妹が苦手だった。

容姿端麗文武両道、家事も一通りこなし、性格は落ち着きがあり善良。

世間でよく聞くような、横柄で生意気な女子高生の要素は何一つない。

口うるさくはあるが、ヒステリックに喚き散らすこともない。

自分のような出来損ないでも、きちんと兄として立ててくれているのが分かる。

それがとても恐ろしい。

嫌ではない。そんな感情を抱くのもおこがましい。

だが、妹の近くにいと息が詰まりそうになる。

「ん？」

携帯にメッセージが入っていた。

「飲み会やるから参加してくれ」

という短い文面を送ってきたのは、大学の友人である。

「気が向いたらな」

こちらもごく短い文面を返す。

ああいう場はあまり得意ではない。

すぐに返信があつた。

「マジで頼む。助けると思つて」

信彦は溜め息をついた。

日頃から何かと世話になっている男だ。

こども食い下がられると、断るのも気が引ける。

それに。

機嫌の悪そうな妹から逃げる、良い言い訳にもなる。

「OK」

軽くシャワーを浴びて部屋に戻つてくると、

集合場所と時間が指定されたメッセージが届いていた。

「あんま時間ねーな」

信彦は急いで身支度を済ませた。

といつても、身だしなみにこだわる方ではない。

無地のTシャツにジーンズという軽装に、薄地のジャケットを羽織る。

リビングに出ると、桜子から声がかかった。

「兄さん、出かけるの？」

「飲み会に誘われたから行ってくる」

「夕飯は？」

「いらない。鍵もかけとけ」

「分かったわ」

玄関を出ると、信彦は「ほっ」と息をついた。

「ま、あいつもおれが居ないほうが気楽だろ」

そんなつぶやきを残し、駅まで歩く。

見慣れた住宅街だが、夕焼けに染まるのを見るのは久しぶりだ。

早々に家を出た甲斐もあって、少し時間に余裕があるらしい。

ふと思いついて、神社の参道を登る。

この時間なら、綺麗な夕日が拝めるはずだ。

「おお。やっぱり」

参道を登り切って振り返ると、地平の彼方から、夕日が一直線に差していた。

それが鳥居を抜け、社をも照らす。

こじんまりとした小さな社だ。

朝日ではなく、夕日に向かって建てられたのは何かいわくがあるのだろうか、

この街に住んで二年もしない信彦には分からない。

でも、黄昏に照らされる社は神々しく、心が洗われていく気がする。

「ついでに何かお願いしていくか」

信彦は財布ではなく、ポケットから適当な小銭をあさり、

確認もせず賽銭箱に投げ入れた。

「おれにもせめてひとつくらい、桜子に勝てる特技ができますように」

そんな願い事を無意識にしてしまう。

信彦は自嘲し、ごまかすように背伸びをした。

その時だった。

がくん、といきなり両足が力を失い、あわや地面とキスしそうになった。

すんでのところで手をつくが、視界がぐるぐると回って気持ちが悪い。

「なんだこりゃ……おい……」

妙な景色が見えた。

真っ黒な空が、ところどころ赤い光を放っている。

それらがすべて、西の方向を示しているようだ。

見る。

そこに強烈で、真っ白な光――。

――でかしたぞ、こぞう。

不気味な声が聞こえた。

あたりを見渡そうとしたができなかった。

身体が金縛りにあったように動かないのだ。

(おい、マジか……！)

目眩いはどんどんひどくなる。

やがて視界が真っ暗になり、全身がズキズキと痛み始めた。

(このまま死ぬんじゃないだろうな……?)

そう思いつつも必死にこらえていると、やがてめまいは引いていった。

身体にも力が戻ってきた。痛みはもうない。

「何だったんだ?」

立ち上がると、もう日は沈み、あたりは薄暗くなっている。

どうやら結構な時間、うずくまっていたようだ。

「やばっ、時間……!」

慌てて参道を降り、駅までの道をひた走る。

どういうわけか身体がとても軽く感じる。

さっきの反動なのだろうか。

ともかく病院に寄る必要はなさそうだ。

滑りこむように改札を抜け、閉まりかけの電車の扉をこじ開けて、帰宅時間の混雑でそこそこ密度の高い車内でようやく一息ついて。

異変に気付いた。

——なんだこれは……！

脳を焦がす、甘い匂いが充満していた。
初めて嗅いだ匂いだ。

だがそれが何なのか、信彦にはわかった。
ヒトの匂い。

いや、人間の命の匂い。

それはとても芳醇で、甘く、まろやかに、
信彦の「食欲」を刺激した。

(は……嘘だろ……?)

満員電車に「エサ」がひしめいている。

それもどうやら、比較的若い女性に限られるらしい。
くたびれたOL。

清楚な雰囲気漂う同年代の娘。

瑞々しい女子高生。

ケバケバしい四十頃の婦人。

朗らかに談笑する、ごく幼い少女たち。

それらの口元に目が行く。

そこから、命を奪うことができる。

喰らえばどれほどの満足感が得られるのか、

信彦には分かってしまった。

(いやいや、ありえんて。正気にもどれ……！)

頭を振る。馬鹿げた思考を追い出すために。

もちろん効果は無かった。

信彦は目を閉じた。

しかし、逆に感覚は研ぎ澄まされた。

なぜか車内の様子が良く分かる。

どれほどの距離に、どんな人間がいるのか。

どんな姿勢で、どこを向いているのか。

(夢でも見てんのか。いつから——あのお社か？ おれはまだ気絶で
もしてるのか)

ふと、信彦の感覚が妙な動きを捉えた。
そう離れてない場所。

脂ぎったスーツ姿の男が、中学生くらいの少女の尻をまさぐっている。
目を開ける。

感じた通りの光景があった。

少女は顔を真っ赤にし、うつむいて耐えているようだ。

痴漢男があからさまに鼻息を荒げている。

考えるより先に、信彦は男の手を捻り上げていた。

「ひっ！」

睨みつけて、ぱっと手を放す。

痴漢男は人の波をかき分け逃げていった。

「大丈夫？」

「は、はい。ありがとうございます……」

少女が顔を上げ、視線が合う。

どくん！

信彦の心臓がはねた。

同時に少女の瞳が「とろん」と溶け、色っぽい熱が灯った。

うすく開いた口唇に目が行く。吸い寄せられていく――。

(アホかって！)

信彦は歯を食いしばって顔をそむけ、少女から逃げるように人並みをかきわけた。

が、危機は続いていた。女はそこかしこにいるし、耐え難い芳香が充満している。

目的の駅に着く前に、信彦は電車を降りた。

そして駅のトイレに駆け込み、個室にこもる。

しばらくすると、妙な衝動は次第に消えていった。

「ふー。病院いかなきゃな……」

何科に行ったらいいのやら、と思っていると、
バキッ！

すごい音がして、個室の扉が剥ぎ取られた。

「はっ。」

そこに居たのは三十路ごろの男だ。いや、いるのは分かっていた。分からないのは、どうやって扉を剥ぎ取ったか、だ。

「なんだ、野郎じゃねえか」

男は言った。

「妙な匂いさせやがって……まあいいか。てめえはウマそうだ。喰つてやるから有難く思え」

ぱかつ、と。

男の口が大きく裂けた。そこから覗くのは、まるでサメの標本のような鋭い牙。

それが迫ってくる。

やはり、考えるよりも先に身体が動いた。

信彦は左手で男の顎を下から打ち上げ、そのまま右手の拳を振り抜いていた。

「ぐべっー」

男の胸が消し飛んだ。

そこから上と下に分かれて、男の身体はトイレの床を転がり、シューシューと音を立てて蒸発した。

「はっ。」

真つ白な思考のまま、声が漏れた。

手にはまだ感触が残っている。

剥げた扉はそのままだ。

あまりにも性質が悪く、理解しがたい光景だった。

松平千鶴

わけが分からなかった。

信彦は急いで駅から逃げ出した。

初めて降りた駅だ。駅前も特に盛り場ではなく、閑静な住宅街らしい。人影もまばらだ。

「何なんださっきのやつは。白昼夢？ 妙に生々しい……」

公園のベンチに腰掛け、両手で顔を覆う。さっきの男を消し飛ばした感触が、まだ右手に残っている。人の気配も鋭敏に感じ取れる。

「クスリなんてやってねーのに……とにかく今日はもう帰ったほうが良いな」

友人にメッセージを打つ。

「すまん、今日はやっぱやめとくわ」

返事はすぐにあつた。

「マジか。いや、ほんとに頼むよ。金なら俺が出すから」

「何でそんな必死なんだよ」

「実は合コンなんだよ。人数足りなくて」

信彦は眉をひそめた。

「だったらなおさらいかねーよ。実は気分がひどくて。出かけられる状態じゃない」

次の返信には少し間があつた。

「……だったらしようがないな。いちおう場所だけ教えとく。気が向いたら来てくれ」

メッセージに記された住所は、ここからもそう遠くない。

信彦はそれだけ確認し、ふたたび両手を顔で覆ってうつむいた。ふと。

異質な気配がした。

ただの人間ではない。さっきの化け物とも少し違う。

それが、ゆつくりとこちらに近づいてくる。まるで様子を伺うように。

女だ。若い。

そして自分に向けられているこの不快な感覚が「殺気」というものだと、瞬時に理解した。

「何の用だ？」

信彦はうつむいたまま問いかけた。

そのこの物陰に潜んでいるようだが、そう距離はない。今の声で充分聞こえたはずだ。

息を呑む気配。

しかし返答はない。信彦は顔をあげ、もう一度問いかけた。

「ストーカーはお断りだ。用があるなら姿を見せろ。出てこねーならこっちから行くぞ？」

応じて、殺気の主が姿を現した。

やはり女。いや、少女か。セーラー服を来ていた。たしか隣町の高校の制服。

艶やかな黒髪をポニーテールにまとめた、なかなかの美少女だった。

ただし、手には白木の木刀を握っている。

「おいおい。女子高生につけねらわれる覚えはねーぞ」

少女は答えず、何か「さっ」と手を払った。

すると、手元が明るく輝き、その光の玉が、すう、と頭上に上がり、それまで真っ暗闇だった辺りを、煌々と照らし出した。

「どんな手品だ？ それとも実は人間じゃねーのか」

信彦は肩をすくめた。もう驚くのも馬鹿馬鹿しい。

「私は人間よ。でもあなたは違うようね。ただの人間が、そんな禍々しい気を撒き散らしているわけがない」

少女は木刀を構えた。注意深くこちらを伺ったまま、じりじりと近寄って来る。何か特殊な歩法だ。ふつうの人間なら、動いていることにも気づかないような。

(じゃあ何でおれには分かる?)

信彦は舌打ちした。

「確かに、ただの人間じゃないのは認めてやる。でも初対面の女子高

生に木刀で殴られてやる義理はねーぞ。自己紹介くらいはしたらどうだ？」

答えはない。少女はそのまま、信彦を間合いに捉え、その瞬間に襲いかかってきた。

(ちっ、クソ速いのによく見える)

信彦は難なく避けて後ろに回り込み、「どん」と背中を押した。よろけた少女が、驚愕の表情で振り返る。

少女は慌てて飛びのき、大きく深呼吸した。

「いまのおかしな感じ……特別な魔術？ 私に何を——いえ、この街で何をしようとしているの」

「意味が分からん。何の濡れ衣を着せようとしてんだ？」

「あくまでとぼけるつもり？」

「いい加減笑えねーぞ、ああ？」

さすがに苛立ってひと睨みすると、少女は「びくっ」と震えたようだ。一瞬だったが、恐怖に脚がすくんだ……そう見えた。

「威圧——よほど高位の悪魔《アクマ》みたいね。いいでしょう、私も本気を出してあげる」

少女は構えを解き、何かお札のようなものを取り出した。それを「ふっ」と宙に投げると、途端に光の弾となって、こちらに真っ直ぐ飛来した。

(嘘だろ！)

信彦は慌てて飛び退き、すんでのところで避ける。すると、今度は同じものがいくつも飛んできた。

(おいおい……これ、当たるとどうなるんだ？)

試してやる気にはならない。見れば、避けた光弾はそのまま消失している。かなりの速さで次々と飛来するのには、紙一重ですべてを避け、振り返る余裕すらある。感覚だけでなく、身体能力も向上しているらしい。

(つつても、このままじゃな)

攻撃が止む気配はない。そればかりか、少女は注意深くこちらを伺っている。少しでもスキを見せたら一挙に殴りかかってくるだろ

う。

(だいたい、何でおれがこんな目に合ってる?)

むくむくと怒りがこみ上げてくる。

——その女は餌だ、喰らえ。

そんな馬鹿げた衝動は、さつきからずっと脳内に響いている。

我慢するのが馬鹿らしくなった。

「——っ！」

少女が声にならない悲鳴を上げた。

信彦が一瞬にして眼前に間合いを詰めたからだ。

まったく反応できず、少女はがっちり顔面を抑えられた。

「悪く思うなよ」

ちゅっ。

信彦はためらいなく、少女にキスした。そして本能のおもむくまま

吸いたてた。

ところが。

——この女は違う。

いきなり脳内で声が響いて、衝動が急速にしぼんでいった。

わけが分からぬまま少女を離すと、腰が抜けたようにその場に座り

込んだ。

そして泣き出した。

「ひっく……ひどい……こんなのひどいよおっ……」

「ちよ!?!」

「はじめてだったのにいつ、初めてだったのに——っ！」

「ほんとごめん、マジ悪かった、許して、頼むから泣き止んで!」

それからしばらく、信彦は号泣する少女をなだめ、謝罪し続けた。

拷問のような時間だった。

ひとしきり泣き尽くし、ひとまず落ち着くと、少女は気まずそうに

こう言った。

「私の名前は松平千鶴^{まつだいらちづる}。不動高校の一年生よ」

(桜子より年下かよ。にしては大人っぽいな)

近くで見るとやはり美人だ。凛々しさと可憐さが見事に同居して

いるというか。それに、やたら脚が長くてスタイルがいい。ポニーテールの黒髪は、下せば腰ほどはありそうだ。

「あまりじろじろ見ないで欲しいんだけど」

「余計なこと気にしないで、早く自己紹介の続きをしろ。ただの女子高生じゃねーんだろ？」

「……まあいいわ。家が代々、お祓い屋のようなことをしているの。つまり、あなたみたいなのを退治する仕事」

「おれは真正正銘の人間だ」

お祓い屋……そんな家業が実在したとは。さつきまでのことといい、自分はどうかやら、かなりファンタジーな世界で暮らしていたらしい。

「私のことは話したわ。次はあなたの番よ」

さて、どう答えたものだろうか。

「名前は武藤信彦。大学生だ。家は隣の駅だよ。実家は地方だけだな」

「それで？」

「それだけだ。ほかに話すことなんてねーな」

「あなたはさつきこう言ったのよ。ただの人間じゃないのは認めてやる、と」

信彦は舌打ちした。どうかやら、誤魔化しきれぬ雰囲気ではない。

「こつちだって教えてほしいくらいだ。いきなりこんな身体になっちゃまってわけがわからん」

それから自分の略歴と、社での件を話した。妙な衝動にかられたり、化け物に襲われたが撃退したことも。

千鶴が難しい顔で聞いていた。顔色はやや青ざめている。

「その、人を喰らいたいというのは……今は平気なの？」

「女限定みたいだな。視界に入っつてなきや問題ない」

「私は？」

「あんたは違うそうさ。さつき頭の中で声がした」

「……」

よりいっそう表情が険しくなり、千鶴はしばらく考え込んだ。

「……私の手にあまるわね。上に報告しても構わないかしら？」
「なんで俺に聞く？」

「当分、あなたの自由が保証できないからよ。実験動物みたいな扱いを受けるかもしれない。それでも、現状を何とかしたいのなら——」
「いや、それはちよつとなあ……」

「もう少し真剣に考えたら？」
やや苛立った口調だった。

「んなこと言われてもな。正直実感がわかねえ。寝て起きたら治ってるかもしれない」

「……それだけは無いと断言するけど」

千鶴は溜め息を吐き、名刺を差し出した。女子高生が名刺とは生意気なことだ。

「何かあったら連絡をちょうだい。力になれるかもしれないから」
「デビルバスター悪魔祓い？」

「私たちのような人間をそう呼ぶの。断っておくけど、勝手に自称しているわけじゃないわ。国家資格なのよ」
「へえ……」

信彦はわずかに眉根を寄せる。面倒なことになった。

つまり、国家権力から狙われる身となったかもしれないということだ。

「まあ、これはもらっておく」

信彦は名刺を受取り、しばし千鶴を見つめた。

彼女に対しては、もう衝動はない。しかし、ここで消しておくべきかもしれない。

死体を跡形も残さず殺す。

自分にはできる。どうすればよいのかもなぜだか分かる。

「な、なによ」

千鶴が喉を鳴らした。

信彦はかすかに笑って首を横に振った。

「何でもねえよ。じゃあな」

「ちよつと……！」

「あ？ まだ用があんのか？」

「……いえ。その、気をつけて」

信彦は返事がわりにひらひらと手を振って、その場を後にした。

謎の悪魔

家に帰らなかつたのは不安があつたからだ。
なにせ桜子がいる。妹が衝動の対象外となる保証はない。

(だいぶ落ち着いてきたけど……)

繁華街が近くなるにつれ、人の姿も多くなってきた。

当然、女もいる。

しかし、衝動は電車の中よりだいぶ落ち着いていて、特に気張らなくても我慢できた。

さっきの女子高生を見る限り、命を喰らうというのはやはり妄想だろう。

なぜかは知らないが、無性に女にキスしたくなる衝動だと、信彦は理解していた。

まさか血の繋がつた実の妹にキス——いや、たしかにずっと幼い頃をやつたことがあるが、いまやつたらシャレにならない。

ゆえに、少なくとも今晩は帰宅しないつもりだった。

繁華街を進むに連れ、女性の姿も多くなる。どうやら距離が近いと衝動が増すようだ。

接触などしようものなら衝動が暴発する危険もあつたが、信彦は樂觀視していた。

万が一こらえきれなくても、せいぜい警察を呼ばれるくらいだろう。今の信彦には逃げ切る自信もあつた。

なぜなら、この場所までたつた5分で走つてこれたのだから。

「お、来た来た。武藤、こつちだー」

たどり着いたのは友人に指定された飲み屋である。

合コンの会場だ。

「よう高橋。遅れて悪かつたな」

「いやいや、いま始まつたばかりだからさ。来てくれて嬉しいよ」

4対4らしい。

男の方は高橋のほかに見知つた顔はなかつた。

女の方も、全員見ない顔か。いや――。

「あ！ さっきの人！」

ぱあつ、と笑顔で声を上げたのは、どうみても中学生ごろにしか見えない少女だ。服装も子供っぽいが、なにより背丈が小さい。

ただし、それなりに目を引く美少女だ。

「ああ。ども？」

信彦は軽く会釈して席についた。さっき電車で痴漢されていた少女だ。知らないフリをしたほうがいいだろう。

と思っていたら、彼女は第一印象を裏切るほど積極的だった。

「もお、信彦くんひどいよ。知らんフリするなんて」

いつのまにやら信彦の隣に座り、ほんのりと顔を赤くして絡む。すつかり酔っ払っている。

名前は鏑木優美かぶらぎ ゆみというらしい。

年齢は信彦の一つ上で、じつはお姉さんだった。

「つかユミさん飲み過ぎじゃないの？」

「ユミさんとかかたーい。ユミ、って呼んで」

面倒くさい。寄りかかってくる優美を適当にあしらいつつ、信彦は衝動と戦っていた。

さすがに密着すると堪えるのも一苦労だった。

何よりそれなりの美少女――いや、美女か。とにかくいい女だった。

ちんまりと小さな身体は、近くで見ると見事に女性らしい艶やかさがあるし、服の上からだとかわりにくい、立派な膨らみもある。

むにむにと腕に押し付けられる柔らかな感触。

すつぽり包めてしまいそうな体格差。

妙な衝動などなくとも、健全な男子なら襲いかかりたくなる。

「ごめん。ちとトイレ」

「あ、私も一緒に行く」

「ダメだって。ここで大人しくしてなさい」

「はーい」

さすがに我慢も限界だった。

信彦は頭を冷やすため店外に出て、路地裏に入った。

「はー。なんでああも懐かれたかねえ……」

座り込んで頭を抱えていると、近づく人の気配がした。

「こんなところにいた」

優美だった。何の遠慮もなく信彦の隣にやってきて「んしょ」と腰を下ろす。

と思っただら、すぐさま信彦に身を寄せ腕を絡めてきた。

「おい……」

「んふー。ひんやりして気持ちいい」

「おれは暑苦しいんだけど」

「なら二人あわせてちょうどいいね」

はあ、と溜め息。信彦は我慢するのをやめた。

(てかこれ完全にOKサインだろ。いただきます、と)

くい、と優美の顎をあげ、キスする。

優美は一瞬、「びく」と震えたが、特に抵抗なく信彦に身を預けた。

——この女ではない。

また頭の中で声。

(知るか)

構わず、信彦は優美の口唇を味わった。

舌を差し入れても、抵抗なくすぐに絡めてきた。

(おお。ノリノリじゃん)

応戦したまま抱き寄せ、肩から背中、腰と手を回して撫ぜる。

優美の身体は面白いほど敏感に反応し、信彦は調子にのって胸元に手を伸ばした。

「やっー!」

優美は慌ててその手を抑え、身体を離す。

すっかり蕩けて上気した顔が、言い訳がましくしかめっ面を作っている。

「ダメだよ信彦くん、こんなところで。誰かに見られたら——」

「んじゃ、場所変える?」

耳をくすぐりながら尋ねると、優美は顔を真っ赤にし、「こくり」と

頷いた。

信彦は思わず笑った。

◇

「あつ、あつ、あ——っ！」

ホテルの一室に、優美の嬌声が響いている。

かなり長いこと途切れていない。声はもうかすれていて、それでもなおイヤらしく耳朵を打つ。

(いい子拾ったな。圧倒的に過去最高)

優美の感度の良さと抱き心地に、信彦も止まれない。

相性の良さ、というのは都市伝説か何かだと思っていたが、実際にあるものらしい。

信彦もそれほど女性経験があるわけじゃないが、こんなに具合がいい女にそうそう出会えるとは思えない。

優美も、あれだけ積極的だった割に男性経験は少ないそうだ。今日初めてセックスで達したと言っていた。

それから何時間たったのか。

信彦はすでに4回、優美の身体のあちこちに放出しているが、彼女はその間に十回以上は達したはずだ。

(まだ全然イケそうだけど。これ以上やるとユミが心配かな)

「あつ、ああ——っ！」

壊れたように身体を痙攣させる優美に、腰を止めて囁きかける。

「ごめんユミ。これで終わりにするから、もうちよつとだけ頑張つて」
がくがくと首肯する優美。

少しだけ待って、信彦は猛然と腰を打ちつけた。

「あ——っ、ダメダメダメえええっ！」

かすれ切った声で絶叫する優美をしつかり押さえつけ、最後の放出を終える。

「ふー。めっちゃ良かったよ、ユミ」

声をかけるが、優美はびくびくと身体を震わせるだけで返事がない。

やりすぎたかな、と心配になって頭を撫でてやっている、不意に

身体を起こしてキスしてきた。

「すっごく気持ち良かった。信彦くんありがとう」

「はは。こちらこそ」

まさかセックスで礼を言われるとは。少し微妙な気分ではあるが、男冥利に尽きると言えばそうかもしれない。

でも、優美の様子が少しおかしい。

なんというか、目がハートになっている、とても言おうか……。

とろんとして、信彦をじつと見つめ、とても幸せそうに微笑んでいるのだ。

まるで、今日が人生最良の日だ、と言わんばかりに。

(まさか、これも?)

信彦は思わず眉をひそめる。鋭敏になった感覚や、人並みを大きく外れた身体能力などと同じく、優美を狂わせているのが自分なのだとしたら――。

「出よつか。家まで送るよ」

「えっ。泊まるんじゃないの？ 電車もうなくなってるよ？」

「タクシー代くらい出すからさ」

「やだー！」

がし、と優美はしがみついてきた。

「ね、お願い。今日だけでいいから。一緒に寝よ？」

必死な表情だった。捨てられる子犬でも見ているかのような罪悪感が、信彦の胸を穿った。

それと、他人の意志を支配してしまったかも知れない、という罪悪感ががせめぎあう。

勝利したのは前者だった。

「分かったよ」

信彦が了承すると、優美はまた輝かんばかりに笑った。

◇

いつのまに寝ていたのか、起きるとすでに日も高かった。

慌てて優美を起こし、部屋の惨状に苦笑しあつて、筋肉痛やら何やらで歩くのも辛いという彼女を、結局タクシーでアパートまで送っ

た。

意外と近い場所に住んでいた。愛車のバイクを飛ばせば10分程度で行き来できるだろう。いまさらながらに連絡先の交換をし、帰宅すると、玄関の鍵が開いている。

(桜子がかけ忘れたのか?)

あの妹に限って——にわかには暗い予感がよぎり、屋内に駆け込む。

「桜子ー」

呼びかけながら、妹の部屋に直行する。とんとん、と3、4回ノックし、呼びかける。

「桜子——開けるぞ」

ガチャ。

居ない。

桜子の部屋は、彼女の残り香に包まれている。しかし本人の姿はない。

背筋が凍った。

信彦はしばらくその場で棒立ちになる。

あいつに何かあったら——。

混乱の中、信彦は携帯を取り出し、110番を押しかけた。

そこでいったん冷静になる。まずは屋内を探してからだ。居なかったら携帯に連絡すればいい。

「ふう」

深々と息をついて、まずはリビングに向かう。そこで、尋ね人をあつさりと発見した。

「桜子……」

信彦は安堵のあまりその場に膝をついた。

妹はソファで穏やかに寝息を立てていた。日頃、腰元に落としている艶やかな黒髪は、髪留めで簡単に結び上げたまままだ。

察するに、テレビを見たまま「うとうと」し、そのまま寝入ってしまったか。今日は休日だし、風邪を引くような時期でもない。しかし、妹にしては珍しい失態だ。

「おい桜子、起きろ」

あまり強くないように肩を揺さぶる。

桜子はわずかに眉根を寄せ、可憐な額に、一瞬だけ、無粋にもならない皺を形作った後、「んう……」と声を漏らして寝返りを打った。

その際、夜着が大きくまくれて、妹の白い肌が——華奢な腰元と、たわわな胸の下部があらわになった。

どくん、と。

心臓が跳ねた。沸き起こってきたのは、身に覚えのありすぎるあの感覚だ。

しかも、昨日のものより数倍強力だった。

——くっそ、実の妹だぞっ！

信彦は顔を歪ませ、奥歯を噛みしめて衝動に抗った。とたんに鼻腔をくすぐる甘い香り。

若く清らかな、極上の雌メスの匂い。

きのせい、で済ませられるものではなかった。信彦はもう、桜子を喰らい尽くしたくて仕方がなくなっていた。

その手段、具体的なイメージが脳裏を埋め尽くす。口唇を奪い、肉体を犯し尽くし、心臓をえぐり取って喰らう。常であれば吐き気を及ぼすそれは、とても甘美なものに思えた。

——やめろ。ふざけるな！

今すぐこの場を離れるべきだ。自室に戻って扉を固く閉ざし、打ち付けて二度と開かないようにすべきだ。そうでなければ、すぐそのキッチンで包丁を手に取り、自分の喉をかつ裂いてやる。

だが、出来ない。身体がぴくりとも動かない。いや、おそらくは拮抗しているのだ。桜子を喰らおうとする衝動と、守ろうとする意思とが。

『何をためらう？ 我慢は身体に毒だぞ』

頭の中で声が響いた。

気のせいじゃない。今度は、はっきりと聞こえた。

「ふざける。おれの身体を好き勝手にしてるのはテメエか。桜子に手を出してみる、ぶっ殺してやる。生まれてきたことを後悔させてやる！」

『ふむ？ 常人とは思えぬ意志力だ。それとも、我のあずかり知らぬ力であらがつているのか。だが諦めよ。無理に拒めば、魂が砕け散ってしまふぞ』

「上等じゃねえか。さっさと壊してみろよ、テメエも絶対に道連れにしてやる！」

『——これはこれは。さてはどこぞの世で竜の気に触れたな？ フフ、これは失敗だ。いくら我とて、汝の如き者どもを従えることはできぬ。そのまま、魂が砕けるまであらがつておれ。うまくゆけばその娘の命だけは助かるぞ』

ふつ、と。

一瞬だけ意識が途切れた。その間に少しだけ桜子に近づいている。匂いが一層強くなった。胸が苦しい。びきびきと妙な音が鼓膜を打ち、全身に激痛が走った。

死ぬのはいい。でも、桜子の無事を確信してからだ。

「……兄さん？」

その時、妹が目を覚ました。寝ぼけ眼をこすって身を起こし、滅多に見ることのない、とろん、とした可愛らしい表情で、不思議そうにこちらを眺めている。

——桜子、逃げろ！

声は出ない。だめだ。指一本動かせない。

「おはよう、兄さん。もう、朝帰りなんていいご身分……どうしたの、すごく怖い顔」

涼やかな声が脳に突き刺さる。

(怖いならさっさと逃げろ。おれから離れろ、頼むっ)

声にはならない。代わりに全身を襲う激痛がさらに激しくなった。頭が割れそうだ。四肢がいまにも引きちぎれ、心臓が爆発しそうな感じ。

そうなるなら早くしてくれ。今すぐ。手遅れになる前に、頼む。神さま。誰か。何でもいい、桜子を助けてくれ——！

「兄さん……？」

妹は不安げに、兄に手を伸ばした。象牙細工のように綺麗な細指が

頬を撫ぜる。

ひんやりとした感触。それを中心に、抗い難い熱が広がっていつて。

決壊した。

「きやつ」

妹の、可愛らしい悲鳴を、信彦は暗転した意識の中で聞いた。わずかに残る五感の残滓が、温かで柔らかい感触と、心地よいしびれを伝えた。それは一瞬だった。

あとは耳障りな高笑いと、もはや理解できなくなった言葉が、脳内で響いていた。

『ふはは、これはすごい！ 上物だぞ！ こそぞう、ひとまずぬしの魂は救ってやる。だが、この娘は必ず手に入れるぞ。必ずだ！』

残響と、強烈な光があつて。

直後、信彦は完全に意識を失った。